

詩人ブランデンとウイスキー

渋谷 武弘

エドマンド・ブランデン(Edmund Charles Blunden, 1896~1974)は著名な英国詩人で、我々には関西学院英語校歌“A Song for Kwansei”の作詞家としてなじみ深い。ちなみに作曲は日本語校歌「空の翼」と同じく山田耕筰に拠る。英語校歌は1949年に創立60周年の記念事業で誕生した。1979年にOxfordのClarendon Pressから出版された彼の作品書誌には、わが校歌もきちんと記録されている。彼はずいぶん親日家だったようで、戦前には東京帝国大学で英文学を講じ、戦後まもない時期に英国政府から文化使節として派遣されて3年ほど日本に滞在し、各地で講演や交流活動を行った。創立60周年のときに、作詞者としてまととない好人物を得たといえよう。

詩人ブランデンの作詞にあたって、関西学院の窓口は文学部教授寿岳文章であった。ある4月の花見の頃に、寿岳は京都嵐山に宿泊していたブランデンを家族とともに甲陽園の播半旅館へ車で案内した。淀川沿いに車窓から観る風景は、まだ西国街道に竹むらが望まれるのどかな眺めだったようで、丘の形こそ違おうが緑の感じは、ブランデンが幼児期に過ごしたイングランド南部を想わせると感慨深げに語った。やがて寿屋(現サントリー)の山崎蒸溜所が現れ、車を止めて、寿岳はブランデンに君の好物はあそこで作られると説明したら、詩人は目を細めて喜んだという。ブランデンはサントリーが好きだった。角びんを机上の一隅に据えて、ちびりちびりやりながら詩を書いていたらしい。(参考:寿岳文章「詩人とサントリー」『洋酒天国』14号、1957年6月)

NHK朝ドラ「マッサン」が人気を博した。日本でのスコッチ・ウイスキー醸造の先駆者竹鶴政孝とその妻リタの生涯を原案にしたストーリーで、国産ウイスキー発祥の地山崎蒸溜所がドラマに登場して一躍脚光を浴びた。寿岳はこの山紫水明の地を終生愛し、自宅を向日庵と名付けて、私家版の名にも使った文人であった。

ところで詩人ブランデンの東京帝大教授時代の弟子に関西学院英文科出身の曾根保(後に東京高等女子師範学校教授)がいた。曾根はブランデンからロバート・ブラウニングの詩の手ほどきを受け、生涯の研究テーマとしている。曾根と寿岳は関西学院英文科時代の同期生で、2人で首席を競った仲という。曾根の遺稿集『ある英語教師の記録』によると、校歌作詞を最初に打診したのは曾根だったようである。たぶん寿岳に頼まれたのだろう。“A Song for Kwansei”は、作曲者に山田耕筰を加えて、OB3人の母校愛の結実となった。

【2013年3月まで関西学院職員、同年4月より大阪大学大学院(文)在学中】



『関西学院新聞』第240号、1949年6月25日



♪「ひなげしの花」誕生秘話 ～アグネス・チャンと時井英吉さん～

4月17日、東京丸の内講座特別企画第1回トライアングルトーク「社会の多様性について考える」が開催されました。その時、講師の一人を務められたアグネス・チャンさんと40数年ぶりに感動的再会を果たした関学関係者がおられます。

音響メーカーのバイオニアが米国のワーナーブラザーズ・レコード、日本の渡辺プロダクションと組み、日本で新たにレコード制作・販売事業を始めた時、海外経験豊富な時井英吉さん(経済昭33)がその担当になりました。1972年のある日、日本留学中の美しい香港人女性が時井さんのいる六本木の事務所を訪ねて来ました。そして、香港でギターの弾き語り番組に出演し、人気急上昇中の妹が日本でも活躍したいと考えていることを話されたそうです。

時井さんはすぐさまこの情報を渡辺プロに伝えました。「時ちゃん、香港に飛んで契約をまとめて来て!」。レコードを聴き、写真を見た渡辺晋社長は即断即決されました。

こうして、アグネス・チャンの日本における大ヒットデビュー曲「ひなげしの花」が誕生しました。

【写真提供：時井さん】

